立命館大学　人間科学研究所報

第 1 号

◇◇◇　目　次　◇◇◇

■人間科学研究所　所長あいさつ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
齋藤　稔正（文学部教授）

■人間科学研究所運営委員会とプロジェクト・課題別研究会の紹介 ・ 3

■教育科学研究所研究会開催報告
□1999年度　プロジェクト研究報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
□1999年度　課題別共同研究会報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

■1999年度研究所日誌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

２０００年７月　立命館大学 人間科学研究所

立命館大学人間科学研究所の開設にあたって

人間科学研究所　所長　齋藤　稔正

昨年度１０周年を迎えた教育科学研究所は、定例の年度事業に加えて、哲学者の梅原猛氏による記念講演会などの特別企画も無事成功裏に終え、本研究所の活動を学内外に大きくアピールすることができた。

一方、本学での長期計画では、設置が構想されている人間分野の新学科、新専攻、新大学院などと連携した基礎研究部門の一層の展開を探る、人間科学全般を包括するような研究機関が要請されるにいたった。その実現への具体的取組みとして、衣笠総合研究機構は、教育科学研究所を発展的に改組、拡大して、人間科学研究所を本年４月１日に発足させ、さらに「文部省学術フロンティア推進事業」のプロジェクトの助成を獲得することに成功した。現在、衣笠中央グランドを緑地化する大掛かりな事業が進められているが、来年３月頃には、その北西の一隅に人間科学研究所の建物が完成する予定である。

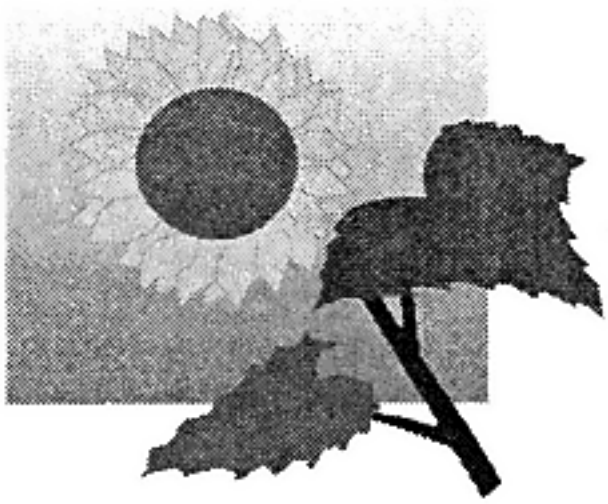
折しも、本学は今年で開学１００周年を迎える記念すべき年であり、それにふさわしい事業といえよう。本研究所には心理、教育、福祉などの領域の基礎研究だけでなく、人間科学全般に及ぶ臨床、応用領域で活躍を希望する社会人の養成といった教学の一端を担うことも要請されている。

ところで、今日の科学技術の発展は、正に日進月歩であり、その勢いは止まるところを知らないほどである。そして、われわれ現代人はその進歩の恩恵に浴し、物質的豊かさを享受している。しかし、その一方で異常なほどの速度で過剰に飛び交う情報に適応が困難になり、幸福なはずの現代社会での生活には大きな歪みが生じている。わが国の社会状況をみれば明らかなように、「心の歪み」を象徴するような病理的な諸問題が噴出している。たまたま日本経済の不況の時期も相俟って、人心の荒廃は目を覆うばかりである。とりわけ青少年の、学校教育現場におけるいじめ、不登校、非行などに加えて、近年は学外での凄惨な暴力や殺人などの事件も頻発している。もちろん、このように荒廃した人心に起因する諸問題の解決には、関係方面からのいろいろな努力がなされている。また、わが国では史上初めての未曾有の高齢化社会を迎えている。そして今後も高齢者の数は益々増加してゆくとのことである。こうした高齢者の介護の問題は社会的な病理現象とは異なるが、経済的な援助も含めてどのような介護をしていったらよいのかなどについては、多様な視点から研究してゆく必要がある。こうした社会的要請に対して、本研究所は学術的な研究結果を踏まえた有効な示唆や実践的な援助を通じて積極的に何らかの貢献をしてゆかねばなるまい。そのためには、従来の視点を越えた新たなパラダイムにより人間を全体的、総合的に探求するような学際的な研究が必要であろう。もちろん、

過去１０年間に蓄積されてきた教育科学研究所の知的所産を考慮しつつ、新たな研究を展開してゆく必要がある。教育科学研究所の時からの継続のプロジェクトに、以下の新たなプロジェクトが加えられた。現在、学術フロンティアに拘わるプロジェクトには、①ヒューマン・サービスを中心としたコア・プロジェクト、②援助技術に関するバリアー・フリープロジェクト、③家族病理に関する家族プロジェクト、④高齢者福祉についてのライフ・デザイン・プロジェクト、⑤発達心理に拘わるこどもプロジェクト、⑥地域と福祉の問題を扱う福祉情報プロジェクト、⑦医療と地域についてのコミュニティ・ケア・プロジェクトの７つのテーマがあり現在進行中である。

いずれにしても、２０世紀最後の記念すべき年に、このような来世紀を展望する新たな構想に基づいた人間科学の研究所が発足したことは、本学の将来への発展を予感させるにふさわしい事業であり、慶賀の至りである。しかし、現代社会では様々な分野で旧来の発想に行詰まりが生じており、２１世紀にむけて新たなパラダイムへのシフトが強く求められている。人間科学の研究においても、改めて「心の本性」に視点を据えた総合的な人間観が要請されているといえよう。

研究所の建物の素晴らしいハード・ウエアが作られているが、そこにいかなるソフト・ウエアを創生するかが、研究所の今後の命運を担うことになる。個性的で、特色のある研究を通じて、本学の発展に寄与したい。



２０００年度　人間科学研究所　運営委員会

所　　長		齋藤　稔正	文学部教授
専任研究員		中村　正	産業社会学部助教授
運営委員会	紀要編集委員	望月　昭	文学部教授
		(前期) 東山　篤規	文学部教授
		(後期) 土田　宣明	文学部助教授
		川口　清史	政策科学部教授
		荒木　穂積	産業社会学部教授
		中川　勝雄	産業社会学部教授
		中川　順子	産業社会学部教授
		山本　忠	法学部助教授
		櫻谷　眞理子	産業社会学部助教授
	紀要編集委員	池田　善昭	文学部教授

２０００年度　人間科学研究所
プロジェクト・課題別共同研究会

プロジェクト

	プ　ロ　ジ　ェ　ク　ト	代　表　者
Ｂ１	ヒューマンサービス	望月　昭（文学部教授）
Ｂ２	個人史の事例	池田善昭（文学部教授）
Ｂ３	争点としての生命	遠藤　彰（理工学部教授）

課題別共同研究会

研　究　会　名	代　表　者
人格発達と教育研究会	櫻谷眞理子（産業社会学部助教授）
発達相談・発達援助研究会	荒木　穂積（産業社会学部教授）

1999年度 プロジェクト研究報告

（1999. 10. 1～2000. 3. 31）

プロジェクトＡ１
社会と認知
代表者◇高木和子（文）

第６回研究会（1999. 10. 6）

テーマ：来年度の実験計画

2000～2002年度のプロジェクト研究についてどのようなテーマで申請を行うかを話し合った。各々の持つ方向性を考慮した結果、テーマは「子ども時代の『ともだち』ー相互作用場面での他者理解の視点からー」とし、３年間で申請する事を決め、今回の研究会は終了した。　【松本将樹(文学研究科)】

第７回研究会（1999. 11. 24）

テーマ：中間報告会

来年１月提出予定の教科研報告書作成の各々の途中経過について報告を行った。また、それらの内容に関して議論を行い、今後の指針について検討した。今回の検討した内容に基づき、次回の研究会で報告を行なう予定である。　【松本将樹(文学研究科)】

プロジェクトＢ１
ヒューマンサービス
代表者◇望月　昭（文）

第２回研究会（1999. 10. 25）

テーマ①「『連携』と実験的行動分析学」
②「日本のしつけ論」

報告者①藤　健一氏（理工学部教授）
②門田幸太郎氏（産業社会学部教授）

研究代表者望月昭氏から、第２回研究会の主題について説明があったのち、２つの話題の提供があった。

「連携」と実験的行動分析学（藤健一報告）が、18:30から19:15まで報告された。報告の主旨は次のとおりであった。(1)現在の「心理学」の他の学問領域での「普及」の一例として、立命館大学理工学部の開講科目（1999年度）中の、心理学関連の内容を取り扱っている科目の現況が分析紹介された。(2)ヒューマンサービス領域で、実験的行動分析学がそれらの連携に貢献する「方法論」としての可能性について、「行動の据え方」「研究計画法」の観点から意見が提出された。(3)更に、実験的行動分析学の方法論の普及の現況について、文献的分析の一例が紹介された。

(4)大学教育における「方法論の習得と訓練」について意見が提出された。

文化と「人格形成」（門田幸太郎報告）が、

19:15から21:05まで報告された。報告の主旨は次のとおりであった。(1)乳幼児期からの社会的学習と文化との関連について、(2)文化のありかたとしての子育てについて、研究紹介があった。（3）文献紹介として「広田照之(著)日本人のしつけは衰退したか（講談社）1999」が取り上げられた。その各章について紹介があり、地域共同体と学校、家庭との関連の変遷を機能の観点からの分析の可能性について、意見の交換があった。

【藤健一(理工学部)】

第３回研究会（1999.12.1）

テーマ①「生体ウルトラディアン・リズム」
②プロジェクト研究の今後の進め方について（打ち合わせ）

報告者①齋藤　稔正氏（文学部教授）

まず、望月教授から、ヒューマンサービスに関わる概念や機能についての説明や、研究会の目的が述べられた。

次に、齋藤教授が、ウルトラディアン・リズムについて報告を行われた。リズムの種類や、特に意識水準のリズム（覚醒とトランス）についての説明が行われた。ヒューマン・サービスとの関わりについては、治療やサービスの提供時の意識状態を考慮する必要性が提言された。

討論の時間には、生体のリズムと脳のリズムの関係や、リズムと日常活動の関連について、活発な議論が行われた。

【小森伸子(文学研究科)】

第４回研究会（2000.3.31）

テーマ：ヒューマンサービスと Qualitative Research

①『教祖』や『消耗品』ではないサービス・プロバイダーであり続けるには
ー『社会的妥当性』をラディカルに考えるー
②Qualitative Researchとフィールド心理学
③99年度総括と今後の展望

報告者：①武藤　崇氏（筑波大学）
②佐藤　達哉氏（福島大学）

今回は、標記のテーマのもとで、実践現場から課題として提出されたヒューマンサービス行為の機能の中の「援護」に関する記述方法の課題として、質的研究（Qualitative research）の問題を扱った。まず武藤氏より、トイレット・トレイニングの施行にあたり、親とのインフォームド・コンセントを含めた実践内容に関する表現・報告形態に関わる問題として、エスノメソドロシー、グラウンディッド・セオリーなど質的研究の関連方法論の推移が紹介され、ヒューマンサービスの領域における技法論にとどまらない本来的な意味での方法論の吟味の必要性が展開された。佐藤氏からは、モード論などからみた心理領域における研究活動の言語的報告の場の整備の問題という角度から討論がなされた。

【望月昭(文学部教授)】

プロジェクトＢⅡ
「学び」の構造
代表者◇佐藤　敬二（法）

第２回研究会（1999. 10. 27）

テーマ：研究報告書作成に向けて

1999年度までの調査結果と研究会での討論内容をふまえて、プロジェクト研究会全体の報告書の内容と構成、執筆分担について意見交換を行い原案の作成を行った。

【長澤克重（産業社会学部）】

第３回研究会（2000. 1. 15）

テーマ①1998年度データの分析
②プロジェクト報告書に向けて
—執筆分担と今後のスケジュール

①1998年度に実施したアンケート調査データについて、全体的な特徴について分析結果を討論した。学生の勉学実態と学部毎のカリキュラムの特徴との関連、学習到達度自己評価と身についた能力との関連、課外活動で身についた能力の特徴、就職活動で身についた能力について、主に議論が集中した。
②プロジェクト全体の報告書をまとめるにあたって、各メンバーの担当部分の分担と今後のスケジュールについて確認した。

【長澤克重（産業社会学部）】

プロジェクトＢⅢ
戦後教育の成立と転回
代表者◇小山静子（文）

第４回研究会（1999. 11. 6）

テーマ①新制中学校　—その整備への歩み—
②1950年代・60年代における京都の高等学校生徒会活動

報告者①菅井　凰展氏（文学部教授）
②冨岡　　勝氏（京都大学）

①新制中学校の施設、設備の整備状況や各中学校の教育・学習活動の実態を、1950年から1957年までの『京都新聞』を中心に分析した。その結果、発足後まもない新制中学校が、校舎の建設・増改築、あるいは設備・備品の整備をいかにして行い、ＰＴＡがどのような役割を果たしたのか、明らかになった。また、生徒の手による学校づくりや地域に根ざした教育活動が行われるなど、この時期の中学校教育の特質も明らかになった。
②京都市内の高等学校生徒会の活動状況を、特に政治教育に果たした意味という観点からとりあげ、京都府高等学校生徒会連絡協議会（生連協）の活動や教員の生徒会指導方針などを検討した。　【小山静子（文学部）】

第５回研究会（1999.11.27）

テーマ①教育委員会法下の京都市、京都府委員会の実際（その２）

②新制高校における小学区制の成立とその課題

報告者①小股憲明氏（大阪女子大学）

②小山静子氏（文学部教授）

①京都府教育委員会の機関誌である『教育展望』を1949年から1953年まで分析することを通して、教育委員会の活動状況や教育行政の課題を明らかにした。

②高校３原則の１つである小学区制は、京都においては1948年から1985年まで実施されていたが、1961年以降、京都は小学区制が行われている全国で唯一の都道府県であった。どうして京都では小学区制が維持されたのか、そしてなぜ1985年になって制度が変わったのか考察するために、小学区制の下でどのような課題が存在していたのか、1950年代前半、1960年代後半、1970年代後半の３つの時期にわけて検討した。　【小山静子(文学部)】

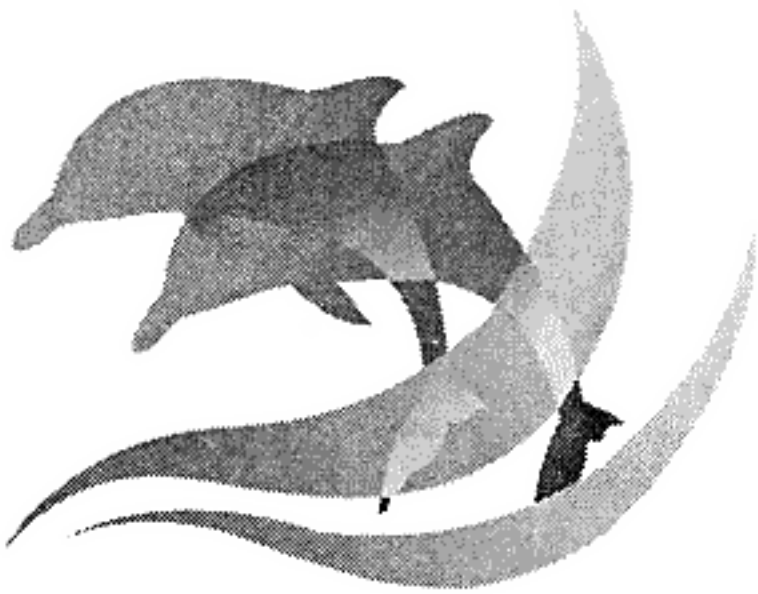
第６回研究会（1999.12.25）

テーマ：青少年に対する社会道徳の形成

報告者：中村隆文氏（神戸女子大学）

府議会と市議会の議事を検討しながら、青少年の非行や犯罪がどのようにとらえられていたのか、そしてその原因がどこにあると考えられていたのか明らかにした。

【小山静子(文学部)】



1999年度 課題別共同研究会報告

（1999. 10. 1～2000. 3. 31）

人格発達と教育研究会

代表者◇高垣忠一郎（産）

第４回研究会（1999. 11. 16）

テーマ①いじめ克服の研究

②ある事例について

報告者①山本奈々絵氏（社会学研究科院生）

②辰巳　朋子氏（京都市下京区青年の家）

山本氏より、いじめの後遺症の克服のプロセスについての研究報告があった。いじめの後遺症の克服を自己肯定感と同一性の達成という視点からみ、いじめの後遺症を心的外傷後ストレス障害ととらえ、その癒しのプロセスと重ね合わせながら、いじめの後遺症を克服するプロセスを考えるものである。討論では仮説されたプロセスの段階があまりにも一直線にきれいに描かれすぎているのではないかという問題が主に議論された。

辰巳氏より、南青年の家の「しごと・おためしプロジェクト」の取り組みについて報告があった。高校生や青年がいろんな仕事を試しに経験してみることが、彼らにどのように受け止められるか、また職場にどのように受け止められるかが報告され、学校現場での関連する取り組みの経験から意見交流がなされた。

【高垣忠一郎（産業社会学部）】

第５回研究会（2000. 1. 14）

テーマ①「学級崩壊」

―子どもとの出会いなおしは可能か―

②教師・生徒・親に対するサポートシステムのあり方について

報告者①春日井敏之氏（西城陽中学校教諭）

②浦田　雅夫氏（社会学研究科院生）

浦田氏の報告は、今日の学校の子ども達の抱える問題が個人の心理的問題の解決によって解消されることもあるが、実際には彼らをとりまく環境がその要因になっていることも多いゆえにその環境システムに働きかけるエコロジカルなアプローチの必要性を論じ、スクール・ソーシャル・ワーカー等の専門家の連携のあり方について問題提起するものであった。

春日井氏の報告は、中学校現場での生徒、特に女子中学生の「暴言」が「ことばのスキンシップ」になっている様子や、いじめに対する取り組み例等を紹介しながら、今時の中学生に教師がどうつきあっていけばよいのかを考えさせるものであった。

【高垣忠一郎（産業社会学部）】

第6回研究会（2000.3.17）

テーマ①ある女子学生の事例

②思春期にあたる糖尿病家庭療育児の自己肯定感に関する研究

③いじめの後遺症の克服とそのプロセス

報告者①芳田　知代氏（平安女学院中学校教諭）

②宇治　照代氏（社会学研究科院生）

③山本奈々絵氏（社会学研究科院生）

芳田氏は中学校の女生徒の学校不適応のケースについて詳細に報告した。家庭的な問題や男性とのつきあいなども含め、この生徒の問題をどうとらえるのかをめぐって意見交換がなされた。

宇治氏と山本氏の報告はいずれも修士論文の報告である。宇治氏は小児糖尿病に罹患している子どもの自己肯定感の実態を知り、何が自己肯定感の育成に関与しているのか、そしてまた糖尿病に罹患し療養を続けることが自己肯定感に関わっているかを分析することにより、自己肯定感を念頭に置いた小児看護のあり方を提言した。

また山本氏はいじめを受けた者がその後遺症をどのように克服していくのか、それを自己肯定感と同一性の達成という視点からとらえようとした。そしてその克服のプロセスを仮説的な６つの段階でとらえている。７人の聞き取り調査からその仮説をほぼ検証することができた。　【高垣忠一郎（産業社会学部）】

発達相談・発達援助研究会

代表者◇櫻谷眞理子（産）

第3回研究会（1999.10.31）

テーマ：発達のみちすじと保育・教育

①乳児期の発達と保育・教育

②１歳頃の発達と保育・教育

―１歳半を中心に―

報告者①福井　咲月氏

②木下　孝司氏

最初に、福井咲月氏より主に乳児期の発達と保育・教育について話がありました。その際、乳児期を４カ月、６・７カ月、８カ月、１０カ月のそれぞれの段階に分けて、それらの特徴と保育や教育で求められることを確認しました。また、宇治市の母子保健体系を例にとり、乳幼児健診の意義と、健診とその周辺のフォローなどとのつながりのあり方についての説明もありました。

次に、木下孝司氏より主に１歳半の発達と保育、教育について話がありました。ここでは、発達検査中の個別課題に取り組む子どものＶＴＲを見ながら、そこでの観察点や子どもの様子から見えてくる発達的な力の説明がありました。また、子どもにとって「生活」とは何なのかという視点で、保育や教育実践に求められるものについてのお話もありました。

【長谷川紀絵（京都府立丹後養護学校）】

第4回研究会（1999. 11. 14）

テーマ①２、３歳児の発達と保育、教育

②４、５歳児の発達と保育、教育

報告者①藤野　友紀氏（京都大学教育学研究科）

②荒木　穂積氏（産業社会学部教授）

２、３歳児の発達を自我の誕生から拡大、充実の側面から説明していく。自我の芽生えは言葉を獲得してくる１歳半くらいから現れる。そして２歳に入ると自分の意図を貫きつつ、尊重すべき相手の意図にも気付き始める。この時期の事例をＶＴＲで映しながら詳しく話して頂いた。

４歳児は自我が充実するとともに表象機能を獲得していく時期である。これを獲得する事で相手の考えていることを考える＝心の理論を自己内に成立させる。（メタメタ認知）また、思考と感情の体制化により、認識力が飛躍的に充実してくるのである。自己と他者とのやりとりがスムーズに行えるようになり他者認識もより拡充していくと言われている。

このように深まった認知力をバネに３次元の世界をきり開いていく。（６歳へ）

次回は、５、６歳児の発達を行う予定である。　【立田幸代子（社会学研究科）】

第5回研究会（1999. 12. 12）

テーマ①６、７歳頃の発達と保育、教育

②学童期における「かきことば」の発達と「自己」形成

報告者①丸山美和子氏（佛教大学）

②服部　敬子氏（京都大学）

はじめに６，７歳の就学への接続期の発達課題から説明。まず一つは話しことばを豊かにし、書きことばへの準備を行うとはどうゆう意味があるのか。２つ目は系列化保存の概念の成立の中身。３つ目に時間概念や生活の見通しをどのような筋道で得ていくのか。４つ目は数の操作の基礎となる力を説明して頂き、更に障害児の就学指導のポイントを概略的に紹介して頂いた。午後からは、就学後子ども達が、自己信頼感を養いながら書きことばをどの様に獲得していくのか。また「９才の節」とよばれる質的転換期に、集団的「自己」形成がいかに大切かを講演して頂いた。

【立田幸代子（社会学研究科）】

現代教育思想研究会

代表者◇林　信弘（文）

第２回研究会（1999. 7. 10）

テーマ：ギリシア哲学と実存思想

ー主観性の現象学ー

報告者：日下部吉信氏（文学部教授）

本報告の主旨はギリシア哲学を構造的自然概念と主観性原理の相克の修羅場として捉えることによって、ギリシア哲学の背後で作動していた原理に光をあてようとするころにある。哲学はいわば「地」の上に描かれた「図」であって、その下にはめったに顕在化することのない構造的な沈黙の原理、自然概念があった。「自然」（ピュシス）は印欧諸語分岐以前に淵源するほとんどアルケオロジックな概念であり、それはいわば集合的無意識として印欧語族に属する古代諸民族、とりわけギリシア人の意識を潜在層から規定し

ていた。前6世紀のピュタゴラス哲学と共に主観性原理がギリシアに立ち現われたとき、それは必然的にこの構造的自然概念と相克の関係に立ちいたらざるをえなかった。ピュタゴラス派に対する大規模な迫害、ヘラクレイトスの怒り、エンペドクレスの苛立ち、アナクサゴラスに対するソクラテスの反発、プラトンのイデア思想に対するアリストテレスの反発などは、すべてこの相克の現象諸形態とみなされねばならない。否、ギリシア哲学そのものがこの相克の現象形態なのである。このような見地からギリシア哲学を見るとき、ギリシア哲学の本体はピュタゴラス派の学統上にあったソクラテス・プラトンにではなく、ギリシアの自然哲学にこそあったのではないか。ソクラテス・プラトンを中心とするギリシア哲学史観は「近代の主観性の形而上学」の視点から見られた哲学史観でしかないのではないか。したがってきわめて不当なものではないか。本報告は、ギリシア哲学を構造的自然概念と主観性原理の相克の修羅場と見る観点から、従来のギリシア哲学史観を根本的に問いなおそうとするものである。

【日下部吉信(文学部)】

※本報告要旨は、第30号の掲載に間に合わなかったため、今号に掲載しました。

第3回研究会（2000.3.17）

テーマ：人間の自然と歴史
—歴史的人間学の検討—

報告者：宮嶋秀光氏（名城大学）

近年、ドイツでは「歴史的人間学」という新しい教育研究のスタイルが登場してきている。これは、かつて戦後の一時期、旧西ドイツや日本で流行した「教育人間学」の再興ともいえるが、しかしそれは、「人間自然」のとらえ方という点で、かつての「教育人間学」とは全く異質のものでもある。つまり「人間自然」は、従来の「教育人間学」におけるように統一的で普遍的なものというよりは、むしろ「多元的」で「歴史的」なものとみなされているのである。本報告では、この新しい構想を検討する作業の一環として、近代「人間学」における「自然」や「歴史」という概念の変遷を再考することによって、この構想が、従来の「人間学」の伝統に属するというよりも、むしろ近年のポスト・モダニズムと深く関わっていることを指摘しようとした。

【宮嶋秀光（名城大学）】

統計教育研究会

代表者◇長澤克重（座）

第2回研究会（2000.1.29）

テーマ①統計的検定の限界と問題点について
②統計学教科書プランの検討

報告者①佐野一雄氏（福井県立大学）
吉田　央氏（東京農工大学）

①モリソン、ヘンゲル著『統計的検定は有効か—有意性検定論争—』梓出版を、テキストとして、統計的検定の有効性に関する論争について議論を行った。ここに収められている諸論文の論点は古典的な批判論といえるが、「統計的検定万能論」が優勢である今日においてこの点を再確認することの意義は大きかった。この本で取り上げられている諸論点

をめぐって、主要には確率的方法を適用するための諸条件について、意思決定の方法としての統計的検定論と基礎科学的研究としての推論の違いについて、議論を行った。テキストの論調は批判的な面が前面に押し出されており、それは統計的検定を無批判に利用する事例が目立つ現代の時流への警鐘としての意義をもつが、一方で、著書たちがいう統計的検定を適用できる条件を満たしている事例も具体的にあげておく必要もあるのではないか、という意見もだされた。

②今年度中に予定されている教科書出版のプランについて、内容と執筆分担の確認を行った。原稿提出締め切りは８月末の予定。

【長澤克重（産業社会学部）】

環境教育研究会

代表者◇笹谷康之（理）

第1回研究会（1999. 4. 9）

テーマ：ＥＭＳの不適合事項報告書

報告者：平井　孝治 氏（経営学部教授）

第2回研究会（1999. 4. 13）

テーマ：環境監査の証拠論１

報告者：大森 明子氏（経営学部研究科）

第3回研究会（1999. 5. 23）

テーマ：大学環境教育と問題解決能力

報告者：北条 祥子氏（尚絅女学院短期大学）

小堀　洋美氏

（武蔵工業大学環境情報学部）

榎本 義行氏（東京国際大学国際関係学部）

上田 泰史氏（慶應大学環境学部）

大学環境教育研究会の毎年のミニシンポジウムも回を重ね、１９９９年度は、学生の自主的な問題解決能力の育成にまで踏み込む議論が進められるようになった。教員２名、学生２名の、計４名の発表を聴くと、いずれも学生間や学生と社会人との環境コミュニケーションを広げている点が共通しており、相違点も目立ち、興味深かった。

北條祥子は、「『環境ホルモン』などの身近な題材を使った環境教育」と題して、尚絅女学院短期大学における、女子短大生の生活実感に対応した実践的演習プログラムを紹介した。洗剤や化粧品といった日常生活品が取り上げられ、学生が母親を巻き込んで製品の成分表示を克明に調べるという負担が相当大きな課題をまじめにこなしている点が、圧巻であった。高校までの授業でもそうであるが、大学の授業ではなおさら生活とは無関係と学生が認識している今日において、母性に訴えて徹底的に生活に密着した授業を行う効果が評価できる。

小堀洋美からは、「大学におけるISO14001の認証取得　―その環境教育実践の意義」と題して、武蔵工業大学環境情報学部のISO14001に基づく、学生の教育訓練と、有志学生を含めた内部審査等の学生とともに築く環境の継続的改善のしくみについて報告があった。

学生と教員や事務員が協働することによって、環境教育が、環境マネジメントシステム構築の実践と、表裏一体で促進されている点が印象的であった。

上田泰史は、「現場体験学習による環境学習のあり方」と題して、東京国際大学国際関係学部下羽ゼミの活動の蓄積に基づき、環境問題が深刻な国内外の現地体験の学習の成果と学習プロセスについて報告した。下羽ゼミの学習プロセスの準備・事前学習、現地訪問、レポートの作成とゼミでの報告・共有、解決策の策定を含めた報告書の作成と発表・発信という、四つのステップは、ISO14001と同様のPDCAサイクルとみなせる。さらに、環境NGO・他大学の学生等との交流の中で、外部のチェックを受け、継続的改善につながっていると考えられた。

榎本義行は、「学生の全国ネットワークと環境活動のあるべき姿　―きゃんぱすえころじー実行委員会の活動を通じて」と題し、ごみダイエット学園祭の慶応大学での実践から他大学への波及的展開までや、全国の学生が集まるギャザリングの成果等を発表した。携帯電話・ＰＨＳとインターネットとを使いこなし、飛行機で国内外を駆け抜け、フットワーク軽く時代をリードする若者らしいネットワーキング活動を行っていた。また、教員は教える人で、学生は教わる人といった関係性を越えて、教員が学生の主体性を認めて引き出すように、教員にファシリテータを期待している点が特徴的だった。

北條は、女子短大の一授業という制約条件の中で、生活から考え母親とのコミュニケーションを起こすまで至る、いわゆる教育原理でいう教育内容・教育方法・教師の熱意の三拍子揃った正統派のプログラムを示していることに対し、小堀は、学部の教職員と学生とが協働する社会的しくみづくりとしての環境教育のプロセスまで言及した。一方、上田は、ゼミの良き伝統の上に立脚して「なぜか？」と問うところから始まる真摯な議論を進める正統派の路線で、榎本は軽やかなネットワークを重視してつながりを広げていく路線でと、対比的だった。良い悪いはさておき、浅田彰の『逃走論』風に言えば、上田のパラノイアに対し、榎本のスキゾフレニと言えようか。

今日、民間企業はもちろん、大学、自治体、その他多くの組織にISO14001の認証取得が広まり、環境分野ではマネジメントの考え方が広まりつつある。そこで、大学では、下羽ゼミのゼミ活動プロセスとしてのPDCAによる継続的改善にみる環境教育と、武蔵工業大学環境情報学部の環境マネジメントシステムとの融合を目指す解決策を求めるべきであろう。さらに、榎本の指摘する学生の水平のネットワーク・コミュニケーションや、北條が実践した親子のコミュニケーションと言う、拡張性のある環境コミュニケーションを展開すべき時代が来ているのであろう。環境教育と、環境マネジメントシステムと、環境情報システムの構築・運用をも含めた組織や団体を越えた環境コミュニケーションとの３点の融合に、環境問題解決のカギがあるように思えたミニシンポであった。

第4回研究会（1999. 6. 4）

テーマ：環境監査の証拠論２

報告者：大森　明子氏（経営学部研究科）

第5回研究会（1999. 6. 18）

テーマ：環境報告書の現状

報告者：東田　明 氏　（経営学部生）

第6回研究会（1999. 7. 1）

テーマ：ＯＢからみた大学環境教育

報告者：下村 純子氏　（環境市民）

森島　朋三氏

（大学コンソーシアム京都事務局次長）

第7回研究会（1999. 10. 15）

テーマ：ＩＳＯエコラベリングの一般原則

報告者：平井 孝治 氏（経営学部教授）

第8回研究会（1999. 10. 29）

テーマ：タイプ２のエコラベル

報告者：平井 孝治 氏（経営学部教授）

第9回研究会（1999. 11. 5）

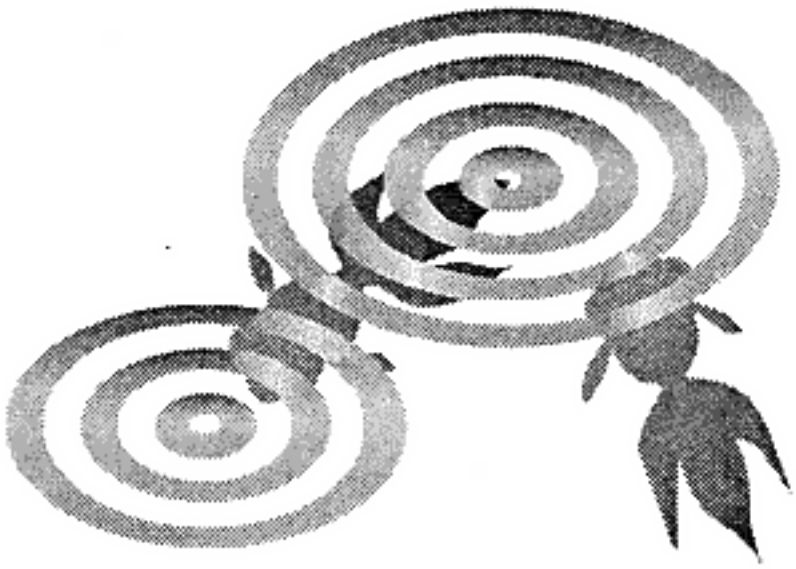
テーマ：環境会計のこと始め１

報告者：東耕　功 氏（経営学部研究科）

第10回研究会（1999. 11. 26）

テーマ：環境会計こと始め２

報告者：東耕　功 氏（経営学部研究科）



1999年度　研究所日誌　(1999.10.1～2000.3.31)

□□□□□　10月　□□□□□

6　プロジェクトＡＩ研究会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第６回／学而館研究会室）
15　運営委員会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第６回／専任研究員室）
　課題別◇環境教育研究会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第７回／アクロス704会議室）
25　プロジェクトＢＩ研究会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第２回／学而館研究会室）
27　プロジェクトＢⅡ研究会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第２回／学而館研究会室）
29　課題別◇環境教育研究会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第８回／アクロス704会議室）
31　課題別◇発達相談・発達援助研究会・・・・・・・・・・・・・・・（第２回／末川記念会館）

□□□□□　11月　□□□□□

5　課題別◇環境教育研究会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第９回／アクロス704会議室）
6　プロジェクトＢⅢ研究会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第４回／私学会館会議室）
14　課題別◇発達相談・発達援助研究会 ・・・・・・・・・・・・・・・・（第３回／恒心館）
16　運営委員会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第７回／専任研究員室）
　課題別◇人格発達と教育研究会 ・・・・・・・・・・・・（第４回／平安女学院中・高会議室）
24　プロジェクトＡＩ研究会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第７回／学而館研究会室）
26　課題別◇環境教育研究会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第１０回／アクロス704会議室）
27　プロジェクトＢⅢ研究会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第５回／私学会館会議室）

□□□□□　12月　□□□□□

1　プロジェクトＢＩ研究会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第３回／学而館研究会室）
12　課題別◇発達相談・発達援助研究会・・・・・・・・・・・・・・・（第４回／末川記念会館）
21　運営委員会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第８回／専任研究員室）
25　プロジェクトＢⅢ研究会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第６回／私学会館会議室）

□□□□□ 1月 □□□□□

14　課題別◇人格発達と教育研究会 ・・・・・・・・・・・（第５回／平安女学院中・高会議室）
15　プロジェクトＢⅡ研究会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第３回／末川記念会館）
18　運営委員会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第９回／専任研究員室）
27　運営委員会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第１０回／専任研究員室）
　　図書選定委員会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（専任研究員室）
　　紀要編集委員会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（専任研究員室）
29　統計教育研究会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第２回／末川記念会館）

□□□□□ 2月 □□□□□

17　現代教育思想研究会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第３回／アカデメイア会議室）

□□□□□ 3月 □□□□□

13　運営委員会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第１１回／専任研究員室）
17　課題別◇人格発達と教育研究会 ・・・・・・・・・・・（第６回／平安女学院中・高会議室）
31　プロジェクトＢＩ研究会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第４回／啓明館）

当研究所では、教職員のみなさまからの所報掲載の原稿を歓迎しています。

立命館大学　人間科学研究所報　第１号

発　行　日　２０００年７月

編集・発行　〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1

立命館大学　人間科学研究所

TEL　075-465-1111(代表)　内線2558

FAX　075-465-8245　　内線2544